＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜日本の民謡 CD で聴くふるさとの唄＞

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

松岡　裕治

◇はじめに

血につながるふるさと……心につながるふるさと……言葉につながるふるさと……詩人は、ふるさとをこのように歌いました。ふるさとは精神の揺藍であり心のオアシスです。

私たちのふるさとは、戦後、めざましい発展と変貌を遂げてきました。しかし、今では、これまでの繁栄と豊かさにかげりが見え、いたるところにほころびが見え始めています。

美しい日本の自然環境も、破壊が進み、日本の風土と景観は時の流れと共に大きく様変わりしつつあります。

かつて私たちの祖先は、生まれ育った土地で労働の汗を流し、さまざまな人生を送りました。ふるさとの唄・民謡は、遠い祖先たちの尊い労作業の中から生み出された仕事の唄であり、それは命の発露でもあったのです。

けれど作業の近代化が進み、あらゆるところに機械が導入され、仕事の形態は大きく変化しました。それとともに、日本の伝統文化、伝統芸能である民謡は、急速に消滅していき、今もかけがえのない文化遺産である民謡がどんどん消えて行っているのです。

ふるさとの民謡に少し耳を傾けて、その唄を味わってみましょう。知らず知らずのうちに、私たちの心の奥深いところから、幼き頃のふるさとの原風景や、友だちの顔、父さん母さん、兄弟、姉妹の顔が浮かんできませんか。。

郷土愛という言葉は、今ではあまり使われない言葉になりつつあるようです。しかし、ひとつの家庭だけの幸福ということはありえず、私たちの幸せは地域社会の幸せと強く結びついています。だから、家族を愛する心を隣人に、地域に、郷土に、日本へ、世界へと広げていって、地球全体の幸せの中で、本当の幸せを築いていきたいと思います。

ラジオの時代、その声が“銀の鈴”と称えられた初代鈴木正夫。線の太さと情感豊かな赤坂小梅。粋な市丸、勝太郎。透き通った高音で一世を風靡した三橋美智也の民謡は、人々の心を癒やしてくれました。テレビ時代になってからは、声やルックスがよい歌手に人気が集まり、裾に波模様がある華やかな衣装に身を包み、スポットライトを浴びて唄う歌手たちが、大衆受けする唄い方で民謡を唄いました。

こうした時代の流れの中で、本来の日本民謡が持っていた素朴で、しかも味のある節回しも忘れ去られつつあるのです。

この小稿は、現在入手可能なCDに収録されている民謡のなかから、後世に継承されるべき歌手の演唱を取り上げてみました。模範演唱の評価(◎〇△)は、独自に設けた“演唱の七法”に基づいています。それは、中国・南斉(479-502)時代の謝赫が『古画品録序』の中で絵画の批評基準として提唱した「画の六法」(1.気韻生動。2.骨法用筆。3.応物象形。4.随類賦彩。5.経営位置。6.伝移模写)を援用し、新たに一つを加えたものです。

“演唱の七法”は以下の通りです。

一、素朴野趣（メロディーの流れとリズムが生きいきしていて、風土自然の味わいと、土地土地の人々の息遣いが感じられる演唱）

二、気品格調（粗野、野卑に流れず、生活に真摯に取り組んで生きる姿がにじみ出る演唱。喉と息の使い方がうまく、高音美声を誇ったり、癖のある小節の多用や、声使いの技巧だけに走らない演唱）

三、眼前彷彿（生活と労作業の光景が、目の当たりに浮かぶような表現力のある演唱）

四、郷愁想起（聴く者それぞれが持つ懐かしい心の原風景を想起させ、命の琴線、民族の血に触れるような演唱）

五、情感移入（声の強弱、大小、緩急による曲の構成力、完成度が高く、唄の文句に描かれた情景と、作業者の心情とが一体化した演唱）

六、来由表出（その唄が生まれた由来をよく認識して、先人の名唱のよきところを継承し、発展させている演唱）

七、爽快和楽（爽快感があり、聴いて心がなごみ、楽しくなる演唱）

なお、唄い手とお囃子方は一体のものであり、唄の良し悪しもお囃子方で決まります。お囃子方の名を省略したり、一括して記載しているCDを見受けますが、その無理解と無神経に驚きます。

ともあれこの小稿が、ふるさとの唄と郷土を愛する心を呼び起こし、併せて民族文化としての日本民謡を知るための一助ともなれば望外の喜びです。

① <山の唄>

「蝦夷富士の唄」(北海道)

♪洞爺ナーア ア登別 中山峠ヨ
中に蝦夷富士 聳え立つ

蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山（ようていざん=1893m)の美しさを称え、須藤隆城が作詞作曲。北海荷方節の伴奏の手に、三味線でカッコウの鳴き声を加えてのどかな感じを出した。羊蹄山は北海道西部の後志支庁(しりべししちょう)の倶知安(くっちゃん)、真狩(まっかり)、喜茂別(きもべつ)、京極、ニセコの五町境にそびえる火山だ。

§ ○菊池智次郎 VICG-2040(90)三味線/高橋脩次郎、尺八/下谷博康。泥臭く野趣のある歌唱。

○佐々木基晴KICH-2461(05)三味線/佐々木孝、尺八/松本晁章。

○久野絹枝 COCJ-30331(99)三味線/佐々木孝、尺八/松本晁章。端正な唄い方をしている。

「津軽山唄」(青森)

(西通り)

♪ヤーイデァー十五 十五七がヤエ
十五になるから山 山登るヤエ
奥のお山に木を 木を伐るにヤエ
腹も空いたし日も 日も暮れるヤエ
これを見せたや我が 我が親にヤエ

(東通り)

♪ヤイエデァー
ハァー西の 西目屋ハァーノヤエ
ーにヘナァ ハエデァエ ハェ アー大滝
ハァー二に ひが二に やゃんじ兵衛がヤエ
三にヘナァ ハエデァエ アー三階滝
ハァ親ハァヤ 親知らハァずアヤエ

祝いの席で唄われる。山で働く仕事唄のようだが山の神を祀る祝い唄だ。

岩木川東側で唄われる東通り山唄と、西側の西通り山唄の二通りの節回しがある。東側の唄は古風であまり唄われず、西通りのものが多く唄われる。成田雲竹、川崎きえといった名人たちがこの唄に磨きをかけた。唄の文句から十五七、十五七節などと呼ばれている。

この唄を今日の形にまとめあげた成田雲竹は、現在知られている津軽民謡のほとんどを世に出した。格調高い張りのある声と、美しい津軽弁で唄われる雲竹の民謡は、いずれも津軽民謡演唱の規範。

(西通り)

§ ◎成田雲竹 KICH-2378(01)尺八/神山天水、星天竜。

◎浅利みき KICH-2379(01)尺八/米谷威和男。津軽民謡女性歌手の第一人者。

○大瀬清美 APCJ-5032(94)枯れたいい味を出

している。お囃子方はCD一括記載。

△成田武士 K30X-216(87)土の匂いがする渋い声。笛が寂寥感をかもす。尺八/田村祐、笛/工藤代志範。

△野呂義昭 COCF-13282(96)婚礼の送り出し唄。味のある声。尺八/米谷威和男。

△福士りつ TFC-1207(99)尺八/高橋竹山。音源はSP盤。COCF-32805(04)尺八/斎藤功山。

(東通り)

§◎成田雲竹 KICH-2378(01)三味線/高橋竹山。

○山本謙司 CF30-5003(89)尺八/斎藤参勇、三野宮貴美男。

△成田雲百合 CF-3453(89)土の匂いがする歌唱。尺八/渡辺壮憧。

△工藤竹風 CRCM-1OO08(98)尺八/高橋竹山。

「秋の山唄」(宮城)

♪ハァー 奥州涌谷の 箆岳さまはヨー
山子繁盛の ハァ守り神ヨー
ハァー 山に木の数 野に萱の数ヨー
黄金田圃は ハァはせの数ヨー

夏の朝、まだ暗いうちから近くの山で草を刈り、刈った草を馬の背に積んで戻ってくる。その往き帰りに唄った。本来は秋の雑木伐りの時に唄う木伐り唄。宮城郡、黒川郡、桃生郡(ものおぐん)あたりで広く唄われていた。昭和十七(1942)八年頃、東北民謡の父と呼ばれる後藤桃水(1880-1960)は、これまで草刈り唄と呼ばれていたものを「秋の山唄」と改名する。

涌谷町(わくやまち=遠田郡)は昭和三十(1955)年七月、涌谷町と箆(箟)岳村が合併して誕生。箆岳(ののだけ=236 ﾒﾄﾙ)の山頂部分を占める箆(箟)峯寺(こんぽうじ)にある白山社は、宝亀六(775)年、大伴駿河麻呂が建立したと伝えられ、一山の鎮守、作神様として当地方の信仰を集めている。箆とは矢柄のこと。坂上田村麻呂(758-811)の伝説に由来する矢竹が、山にびっしりと生えていたので箆岳と命名された。

§○鈴木大 K30X-218(87)尺八/米谷龍男。自然な歌唱。声の使い方、小節の返し方も自然で上手い。

○吉沢浩 KICH-2464(05)尺八/郷内霊風。

△菅井兆月 CRCM-1OO18(98)尺八/郷内霊風。素朴なお爺さんが唄っているようで、捨て難い味がある。

「夏の山唄」(宮城)

♪ハァー鳴くなちゃぼ鳥 ハァーまだ夜が明けぬ
明けりゃお山のナァ 鐘が鳴る
ハァー独り徒然だ ハァーこの山道を
一声啼かんせナァ ほととぎす

宮城、桃生、黒川郡の農村で、夏草刈りの往来に唄われていた草刈り馬子唄の一種である。薪にする雑木切り(かくま刈り)の時に唄う。酒盛り唄の甚句が野外で唄われるうち、のんびりとした節回しになったものか。松島北方の品井沼で、菱取りが行われていた明治の末頃まで、菱取り唄としても唄われていた。昭和十七(1942)八年頃、後藤桃水が命名。日々、労働で疲れた体を睡眠で取り戻そうとしている農家の人々の心情が、うまく吐露された秀歌である。美声に頼らず、素朴な仕事唄の雰囲気を出して唄って欲しいものだ。

徒然(とぜん)は“つれづれ”の漢語。中世に使われた“徒然”が東北に残っていて、物寂しい、退屈だとの意味で使われている。

§○鳴子勝栄 APCJ-5035(94)労働者の唄っぽく渋い美声。

△吉沢浩 KICH-2464(05)尺八/郷内霊風、米谷威和男。エコーがわざとらしい。

△熊谷一夫 COCF-13285(96)尺八/郷内霊風。声に強弱を付けたバタ臭い美声。

「会津磐梯山」(福島)

♪(ハァヨイショ)
エイヤー会津磐梯山は宝の山よ 笹に小金が
エーマタ 成り下がる
(チョイサーチョイサー)
エイヤー東山から日にちの便り 行かざなる

まいエーマタ 顔見せに
(チョイサーチョイサー)
(小原庄助さん 何で身上つぶした 朝寝 朝酒
朝湯が大好きで それで身上つぶした
ハァもっともだ もっともだ)

磐梯(いわはし)とは、天まで届く岩のはしごの意。磐梯山は、猪苗代湖の北に位置する成層火山(標高1819㍍)で、明治二十一(1888)年の水蒸気爆発により小磐梯山の山頂を含む北側が崩壊して現在の山容となった。

明治初年のころ、越後の五ヶ浜(新潟県西蒲原郡巻町)から来た油絞りの若い衆が、市内七日町の阿弥陀寺の境内で、越後の五ヶ浜甚句を唄い踊った。それが会津に広まり、盆踊唄、会津甚句などと呼ばれたが、一時"かんしょ踊り(気違い踊り)"と呼ばれたほど熱狂的に唄い踊られた。

昭和九(1934)年頃、小唄勝太郎(1904-1974)が"小原庄助さん、なんで身上つぶした"の囃子言葉で唄うと、全国に広まった。当初、地元の節回しとは異なる勝太郎節にクレームが付いたが、土地の宣伝効果が大きく、黙認された。小原庄助のモデルとなったのは、長野県上伊那郡高遠町河南の小原出身の武士である。寛永二十(1643)年、高遠藩主・保科正之(1611-1672)が会津に入府したとき、侍従して会津に住んだ。会津藩郷頭の職にあり、明治元年の会津戦争のさなか、材木町の激戦で戦死する。

櫓を組んで行う会津の盆踊りは、江戸時代中頃から盛んに行われ、盆唄の文句は玄如節から転用されている。八月十三～十八日に行われる東山温泉の盆踊りは、川の真ん中に三層の櫓を立て、二つの橋を使って櫓を取り囲み、一重二重と輪を作って踊るスケールの大きな盆踊りである。

§ ◎歌川重雄 COCJ-31889(02)高音で味と渋さのある声。雅趣もあり、力んで肩肘張った発声をせず、爽快感がある。三味線/藤本秀花、藤本秀久、笛/米谷威和男、太鼓/美波三駒、鉦/美波駒世、囃子言葉/佐藤松重、網師本律子。

○地元歌手 BY30-5017(85)歌川重雄か。元気のよいご婦人達のお囃子にも野趣がある。

○菅原津志緒 CRCM-1OO19(98)FGS-603(98)三味線/生江忠男、渡部欣宏、石井典夫、太鼓/横山吟風、小池岩夫、笛/田村正男、鉦/鈴木利光、掛声/鎌田美恵子。賑やかなお囃子で唄う田舎のおばさんの雰囲気。

△小野田実 28CF-2874(88)独特の味のある声で、穏やかにさらりと唄っている。三味線/本條秀太郎、本條秀、笛/佐藤華山、太鼓/美波那る駒、チャンチキ/美波祐三郎、囃子言葉/白瀬社中。

△小唄勝太郎 VDR-25152(88)長田幹彦補作詞、編曲/山田栄一。日本ビクター管弦楽団。三味線、鳴り物、合唱入り。音源はSP盤。山田栄一の編曲により、親しみやすく、味のある華やかな曲調が、勝太郎の歌唱とマッチしている。

「筑波山唄」(茨城)

♪お山ナエー
お山筑波はナー 恋風女体
情け情け男体ナー 夫婦山ナエー

金子嗣憧作詞作曲。金子の新民謡作品には、栃木県の「日光山唄」がよく知られている。

§ ○湯浅みつ子 COCF-14308(97)尺八/矢下勇。朗々たる美声で、野趣豊かに唄っている。

「日光山唄」(栃木)

♪ハァー 男体お山をヨー 紅葉が飾りゃ
馬子も小粋なヨー ハァー紅緒笠ヨー

金子嗣憧作詞作曲の新民謡。昭和五十一(1976)年、宇都宮に住む尺八奏者の金子嗣憧(1928-)は、再三、日光を訪れ、中禅寺湖北岸の男体山(2484m)に登って想を得た。自然への畏敬、男体山への畏敬の念がこの唄を作らせたという。歌詞に日光連山、日光東照宮、華厳の滝が詠み込まれている。めりはりを付けて丁寧に唄うと、山唄の感じがよく出る。

男体山は延暦元(782)年、芳賀郡高岡(真岡市)の下野(しもつけ)国府役人の家に生まれた僧・勝道

(735-817)が開山。補陀洛山(ふだらくさん)と命名されたが、後に二荒山(ふたらさん)と改称され、その後、空海(774-835)が音読みの二荒に日光の字をあてて改称したといわれる。

§ ◎美里ゆり COCF-9308(91)尺八/金子嗣憧。金子は千葉県船橋市生まれ。終戦時、イギリス軍の捕虜だったとき、慰問団の尺八を聴く。その音色に惹かれて復員後の昭和二十一(1946)年、船橋市内の都山流尺八の今井百山に入門。同三十(1955)年代には、東京北千住の琴古流尺八、渡辺輝憧の門下となった。同門に藤堂輝明がいる。

○藤堂輝明 COCF-11371(93)勢いがあり、山唄らしく唄っている。

「米山甚句」(新潟)

♪サーサ参らんしょうよ 米山薬師
ひとつ身のため ササ主のため
サーサ頸城見納め 米山三里
峠越ゆれば ササ柏崎

柏崎の西方、中頸城郡(なかくびきぐん)と刈羽郡(かりわぐん)の境にそびえる米山(993m)は、越後富士と呼ばれる。

頂上に泰澄大師創立と伝える薬師堂がある。雨乞いに霊験があるといわれ、五穀豊穣を祈る農民たちの信仰を集めている。江戸時代末、刈羽郡荒浜村出身の力士・登龍山は、相撲よりも甚句を得意としていた。登龍山は後に米山と改名する。いつしかこの米山が唄う甚句は、米山甚句と呼ばれるようになったという。米山の名は力士としての記録はないが、米山甚句の古い踊りは、力士が四股を踏むような野暮ったいものであった。日清戦争(1894～1895)後から大正にかけて、俗謡として広く愛唱された。

§ ◎初代峰村利子 TFC-909(00)声に力があり、軽快な節回しで実にうまい。伴奏者不記載。明治二十九(1896)年、新潟県三島郡雲崎町に生まれた峰村は、小学校卒業後、親戚の長岡芸者の置き屋に養女として入る。十八歳で芸者小仙を名乗り、結婚を機に上京。春日とよ照の名で、大塚に小唄教授の看板を掲げた。その指導ぶりが評判で、NHKから声がかかり、伴奏者として活躍した。米山甚句は、峰村と小唄勝太郎の唄によって県を代表する民謡となった。

◎椿正昭 VICG-2040(90)端正で雅趣と味がある。三味線/藤本秀心、尺八/米谷智。

○初代浜田喜一 COCF-12697(95)戦時下に唄う浪曲風。浜田が一座を組んで巡業していたとき、得意のレパートリーにしていた。

○小重、高橋睦子 COCF-9309(91)お婆さんに近い田舎芸者さんのようだ。味も野趣もある。三味線/勝田信子。

○赤川イシ子 KMH-07923(95)柏崎民謡保存会。三味線/田辺伊勢松、間島正明、内山正三郎、尺八/桑原秀雄。

△市丸 VICG-2064(89)三味線/静子、豊文、鳴り物/堅田喜三久、藤舎呂誠、堅田啓光、笛/鳳声晴郷。市丸の粋でお色気がある歌唱は、他の追随を許さない。

△湯浅弘子 CF-3458(89)三味線/豊静、豊藤美、尺八/石高琴風、佐藤華山。田舎芸者の雰囲気できっちりと唄っている。

「木曽節」(長野)

♪木曽のナー仲乗りさん 木曽の御岳
ナンチャラホイ
(夏でも寒い ヨイヨイヨイ)
袷ショナー仲乗りさん 袷ショやりたや
ナンチャラホイ
(足袋ヨを添えて ヨイヨイヨイ)

ゆったりとしたテンポで、唄と踊りと手拍子が一体となった上品で涼やかな唄だ。木曽谷一帯の村々で踊られていた木曽踊りには、数十種の唄と踊りがあった。永享六(1434)年、木曽家十二代・木曽信道が福島に城を築き、興禅寺を復旧して木曽義仲の菩提寺とする。そのとき倶利伽羅峠(くりからとうげ)の戦勝を記念した霊祭が行われ、風流陣

の踊りがなされた。このときの武者踊りが木曽踊りの起こりであり、その後、盆踊りとして定着したという。室町時代の『閑吟集』に記載されるほど、古くから都にまで知られていた。

木曽川で材木を流し出す王滝川の木流し人夫は、鳶口を使いながら木遣り唄を唄っていた。それがいつしか、お座敷唄の御岳山節になったものらしく、囃し言葉にその名残りがある。“中乗り”は木曽川で木材を運搬する筏の真ん中に乗った筏師だが、その昔、馬に三宝荒神という鞍を置き、その真ん中に乗った人を中乗りさんと呼んでいた。御岳教で神のお告げを信者に伝える人も“なかのり(中座)”と呼んでいる。囃子言葉のナンチャラホイは“なんじゃやらほい”が詰まったもの。梵語に由来するといった説もある。

大正四(1915)年、木曽福島町長の伊東淳(いとうすなお 1876-1942)は、木曽踊りの復活を図り、御岳山節を元唄にして木曽節を作った。自ら“木曽踊り司”を名乗り、振興策として観光客に免許状を発行して唄の普及に努めた。木曽郡木曽町福島では「相許候事木曽踊(相許し候事の木曽踊り)」という免許状を発行している。

三味線、太鼓の鳴り物入りで、賑やかに唄われるお座敷唄の木曽節は、地元のものと節回しが違う。

§ ○奥原行雄、八木広助、小田国雄
COCJ-30338(99)三味線/清香、太鼓/安田赳夫、笛/大橋澄雄。

○加藤幹雄、塩原武光、森下政吉、八木広助
FGS-605(98)三味線/清香、笛/棚橋喜一、太鼓/安田赳夫(木曽踊り保存会)。

△地元歌手 BY30-5017(85)土地の匂いを感じさせて心地よい。

「多幸山」(沖縄)

♪多幸山ぬ山猪 驚くな山猪
嘉名ぬ高波平 サヨ山田戻い
いった山田や 何さる山田が
我が身ん蔵波 出じんちゃせ じんちゃせ
チサキヤリヤリ チサキヤリヤリ
(取やい投ぎりば くみがんかちみてぃ 十日ん二十日ん くんぱとーれ)

本島北の国頭郡の民謡。沖縄のカチャーシー曲の一つ。言葉遊びで地名を歌い込み、言葉尻をとらえて、ときには猥雑な軽口を交え、三線の早弾きとアドリブの早口を楽しむ騒ぎ歌。

読谷村喜名から数キロ北上すると、真栄田岬の南東側から見て北西にのびる険しい山並がある。その北端に一段と高くなった多幸山(たくうやま)。真昼でも薄暗いほど木々が生い茂っており「フェーレー(山賊)の出る場所」として人々から恐れられていた。この山の頂上近くにフェーレー岩と呼ばれる切り立った岩がある。その昔、その岩の上にフェーレーが現れて、ひっかけ棒で多幸山越えをする旅人から持ち物を奪ったという。

§ ○知名定男 KICH-2470(05)
○登川誠仁 RES-118(07)

(令和2年9月19日 日本民謡研究の泰斗・町田佳聲先生のご命日に記す。)